

「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)についてのミドウラーシュ

●創世記の冒頭にある「初めに」と訳された「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)に隠された秘密、その秘密についてミドウラーシュを試みたいと思います。

1. 「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)の文法的情報

●「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)の文法的情報は、「初め、初物、最高、第一」を意味する女性名詞の「レーシート」(רֵאשִׁית)に、前置詞の「ヴェ」(בְּ)が付加したものです。ちなみに、「レーシート」(רֵאשִׁית)の男性名詞は「ローシュ」(רֹאשׁ)で、「頭、かしら」を意味します。男性が「イーシュ」(אִישׁ)、女性が「イッシャー」(אִשָּׁה)であるように、本来の女性名詞の特徴は語尾が「アー」(הַ)となることです。では、「あなた」を意味する「アッター」(אַתָּה)は女性名詞かと言うと、そうではありません。「アッター」(אַתָּה)は独立人称代名詞の二人称単数男性形です。また、「母」を意味する「エーム」(אִמִּי)も女性名詞ですが、だからと言って語尾が「アー」(הַ)とはなりません。物事にはいつでも例外というものがあります。

●ところで、女性名詞の語尾は「アー」(הַ)だけでなく、「ト」(ת)という場合もあります(英語では th で表記するため「ス」と表記する場合があります)。例としては、「レーシート」(רֵאשִׁית)がそうであり、「王国、統治、治世」を意味する「マルフート」(מַלְכוּת)、あるいは「mamレフート」(מַמְלֻכּוּת)もそうです。しかし、これらを独立形の名詞ではなく、連語形の女性名詞だとする解釈があります。なぜそのように解釈できるのかと言えば、連語形の場合、例えば、「主の教え」という場合、「主」という名詞と「教え」という女性名詞をつなげると、「トーラット・アドナイ」(תּוֹרַת יְהוָה)となります。ヘブル語の順序でいうと、前に来る女性名詞である「トラー」(תּוֹרָה)が、「トーラット」(תּוֹרַת)に変化します。後に来る名詞は何ら変化しません。エレミヤ書 26 章 1 節に以下のようなことばがあります。

יעהוּיָקִים	מַמְלֻכּוּת	בְּרֵאשִׁית
エホヤキムの	治世の	初めに
固有名詞	女性名詞の連語形	女性名詞の連語形+前置詞

2. ベレーシートの「レーシート」は名詞の独立形ではなく、連語形であるとする解釈

●もし、創世記の冒頭の「レーシート」を独立形の名詞としてではなく、連語形の名詞と解釈するならば、その後には必ず名詞が来なければなりません。その場合に考えられるのは、「創造する」の動詞「バーラー」(בָּרָא)を不定詞「ベロー」(בְּרֹא)に読みかえることで「創造したこと」となり、連語形の「レーシート」と合わせると「創造したことの初め」という意味になるのです。実際、そのように解釈して翻訳されている聖書がありま

す。例えば、中澤洽樹(こうき)氏の訳がそうです。中澤氏は、1節を「**神が天地を創造した初めに**」と訳しています(中央公論新社「旧約聖書」)。他に、池田潤氏が「はじめに神が天と地を創造した」と訳するのはある意味誤訳である(「ヘブライ語のすすめ」ミルトス社、187頁)として、「**神が天と地を創造したその当初**」と訳すべきだとしています。中沢氏も池田氏もその解釈の背景には、この1節の構文が、従来のように「初めに神が天と地を創造した」という独立節ではなく、3節の「神が言った」にかかる従属節だとする考え方があるためです。3節が主節であるとするならば、2節も1節と同様に従属節となります。池田氏は、もし「初めに」の「初め」が連語形ではなく、独立形であったならば、「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)ではなく、冠詞を伴った「バーレーシート」(בְּרֵאשִׁית)になっていたはずであると説明しています(同書、179頁)。池田氏は文法的に詳しく説明してはいませんが、その内訳を説明すると以下の通りです。

●名詞の「レーシート」(רֵשִׁית)に冠詞「הַ」をつけると「ハーレーシート」(הַרֵשִׁית)となります。ちなみに、名詞に冠詞をつける場合、「ハ」(הַ)が用いられるのですが、この名詞がレーシュ(רֵ)ではじまっているため、冠詞が「ハー」(הַ)となるのです。それに前置詞(בְּ)を付加すると、冠詞「ハー」(הַ)の子音は省略され、母音だけがそのまま残って「バーレーシート」(בְּרֵאשִׁית)になるということなのです。しかし、そのようにはなっていません。調べてみると分かることですが、男性名詞の「ローシュ」には冠詞がつくことがあっても、女性名詞の「レーシート」に冠詞がついている例が聖書の中には一つも見つけれられません。ちなみに、「レーシート」には冠詞がついていないにもかかわらず、英語訳では In the beginning と訳しています。したがって、冒頭の「レーシート」は独立形の名詞ではなく、連語形の名詞だと考えるのが自然で、池田氏が言うように、「初めに神が・・・」という従来の訳を「ある意味誤訳である」というのは一理あるのです。

●池田氏はさらに、「בְּרֵאשִׁית」と書かれているのは、第1節が「**神が天地を創造された初めに(その当初)**」という従属節であることを示している。従属節であるからには、・・・(主節の)附随情報ということになるだろう。」(同、179頁)と述べています。1～2節の従属節が、主節である3節の「神は言われた」を説明する挿入句だとすれば、実際、どのような訳になるのでしょうか。

中澤洽樹訳

「1 神が天地を創造したはじめに—2 地は荒涼混沌として闇が淵をおおい、暴風が水面を吹き荒れていた—3 「光あれ」と神が言った。すると光があった。」

あるいは、

「1 神の天地創造の初めに、2・・・神の霊が水の面をただよっていた時、3 神は言われた。「(そこに)光あれ」と。」

3. 別の視点からの「ベレーシート」の解釈

●こうした訳が可能だということを念頭に入れながら、創世記の冒頭の節について別の視点からさらなるミドウラーシュを試みたいと思います。つい最近のことですが、「ユダヤ人から見たキリスト教」(ミルトス社)を通して、アラム語訳聖書では、創世記の冒頭の「初めに、神が天と地を創造した」という部分を「**主は、知恵をもって天地を創造された**」と訳していることを知りました。これは「ユダヤ人から見たキリスト教」を訳した手島勲矢(いざや)氏自身が書いた論文の中にあつた情報です。私はアラム語訳聖書のその部分について確認

することができませんが、その情報は私にとって衝撃的でした。なぜ、そのように訳せるのかと言えば、「ベレーシート」の「レーシート」を箴言 8 章 22～31 節に基づき、「知恵」を意味する「ホフマー」(הַחֲמָה、これも女性名詞)と理解したためであると手島氏は説明しています。私は、この情報から、以下のように、「アラム語訳聖書」の訳が成り立つことを推論してみました。

●まずは、ソース元である「箴言」について考える必要があります。「箴言」と訳されたヘブル語は、「マーシャル」(מְשָׁל)で、「謎をかける」「質問に答える」「たとえ話で語る」と言った多くのニュアンスを持つ言葉です。イエシュアも「天の御国」について語るときに「たとえ」で話されましたが、その「たとえ」こそ「マーシャル」なのです。つまり、「箴言」と同じ言葉なのです。知恵文学の中で知恵者(祭司や預言者とは別の存在)の用いたテキストはこの箴言でした。

●この箴言 1 章 7 節に、「主を恐れることは知識の初めである」とあります。

「主を恐れること」=「イルアット・アドナイ」(יְהוָה יִרְאוּ)

「知識の初め」=「レーシート・ダーアット」(רֵשִׁית דָּאֵרֶת)

「イルアット」(יִרְאוּ)も「レーシート」(רֵשִׁית)も、ここではいずれも連語形として使われています。「初め」と訳された「レーシート」(רֵשִׁית)は時間的な意味で使われてはいません。むしろ「頭」という意味で、総括的、要約的、全体的、結論的な意味合いで、事柄の全体を表わす語彙として使われています。「主を恐れること」が、知識の総体、総和、全体であるという意味で、「初め」と訳されています。主を恐れることは、知識の初め、または知識が目指すところの総括的概念であるということが言えるのです。

●ちなみに、「初め」ではなく、時間的流れとしての「始め」、出発点としての「始め、開始、最初」を意味する語彙として「テヒラー」(תְּחִלָּה)があります(動詞は「ハーラル」חָלַל)。22 回の使用頻度。箴言ではただ 1 回のみで、9 章 10 節の「**知恵の始め(スタート点)は、主を恐れること**」(新共同訳は「主を畏れることは知恵の初め」と訳しています)で使われています。「知恵の始め」は「テヒラット・ホフマー」(תְּחִלַּת חֲכָמָה)です。「テヒラット」も連語形です。「レーシート」(初め)は物事の総括的表現であるのに対し、「テヒラー」(始め)は物事の順位的表現として用いられています。日本語の「初め」と「始め」はニュアンスとしては明確に異なっているにもかかわらず、新改訳も新共同訳も共に「テヒラー」(תְּחִלָּה)を「初め」と訳しています。

●話を戻します。箴言 1 章 7 節の「主を恐れることは知識の初め」、それは「知識の基本としての主を恐れること」を意味します。知識は教育によって身につけていきますが、人生における本当の知識の基本は何かと問われるならば、それは「主を恐れること」だと箴言は教えています。箴言では「主を恐れる」という言葉が 8 回使われています。では、「主を恐れる」とはどういうことか。中心がしっかりと定まると円を書くことができます。しっかりとした中心点がなければ、円はいびつなものになってしまいます。まさに箴言の言う「知識の初め」とは「主を恐れること」が中心点だということです。それは、神を神として信じることを意味します。

●「主を恐れる」とは、心から主に信頼すること、そしてすべての道で主を認めてゆくこと、それが主を恐れることです。3 章 5 節に「心を尽くして主に抛り頼め(信頼せよ)」とありますが、この「抛り頼む、信頼する」というヘブル語は「バータハ」(בָּטַח)で、大地にごろりと横になって、すべてを任せてゆくという意味です。

すべての道で主を「認める」というヘブル語は「ヤーダ」(יָדָה)が使われていますが、それは親しい交わりを通して相手を「知る」という意味です。聖書では、夫婦関係の交わりもこの「ヤーダ」で表わします。

●日本で、神を恐れるというと、〇〇をしなければ罰が当たるというようなニュアンスになりやすいのですが、ヘブル語の「恐れる」(「ヤーレー」יָרָה)、その名詞の「イルアー」(יְרָה)は、神を神としていくこと、すなわち神を信頼して、自分の生存と防衛の保障を神にゆだねていくことを意味しています。また同時に、神との親しいかわりを築き、どんなことでも打ち明け、ときには神の訓練を通して矯正されながらも神に従っていくことなのです。神を恐れることによって、神は私たちの道をまっすぐにしてくださるのです。

●ところで、箴言 8 章 22～31 節に突如として、「わたし」という先在的存在が登場します。その「わたし」が「知恵」だという主張です。

【新改訳改訂第3版】箴言 8 章 22～31 節	8:26 神がまだ地も野原も、この世の最初のちりも造られなかったときに。
8:22 <u>【主】は、その働きを始める前から、そのみわざの初め(תְּחִלַּת)から、わたしを得ておられた(קָנָה)。</u>	8:27 神が天を堅く立て、深淵の面に円を描かれたとき、 <u>わたしはそこにいた。</u>
8:23 <u>大昔から(מֵעוֹלָם)、初めから(מֵרֵאשִׁית)、大地の始まりから(מֵרֵאשִׁית מִקְדָּמָה)、わたしは立てられた。</u>	8:28 神が上のほうに大空を固め、深淵の源を堅く定め、
8:24 深淵もまだなく、水のみなざる源もなかったとき、 <u>わたしはすでに生まれていた。</u>	8:29 海にその境界を置き、水がその境を越えないようにし、地の基を定められたとき、
8:25 山が立てられる前に、丘より先に、 <u>わたしはすでに生まれていた。</u>	8:30 <u>わたしは神のかたわらで、これを組み立てる者(名匠)であった。わたしは毎日喜び、いつも御前で楽しみ、</u>
	8:31 神の地、この世界で楽しみ、人の子らを喜んだ。

●ヘブル人たちにとって知識や知恵は重要です。したがって、その重要なものがどこから来るのか、何者なのかということを考えざるを得ないのです。知恵がどんなに大切なものか、それを描写するのに擬人化して表わそうとしたのです。特に、知恵は神の属性以上の存在であり、神ご自身であるという理解を箴言の記者は語っているのです。箴言 8 章 11～12 節にはこう記されています。

11 知恵は真珠にまさり、どんな喜びも、これには比べられないからだ。

12 知恵であるわたしは分別(悟り)を住みかとする。そこには知識と思慮(慎み)とがある。

●原文では「わたしは知恵」(12 節)とあります。つまり、「アニー・ホフマー」(הַחֵמָה הַיְהוֹדֵה)です。8 章 22 節以降はこれを鍵にして読まなければ解くことができません。

(1) **知恵の先在性** (22～26 節)

いまだ創造のわざが始められていなかったとき、海も地も山もそれら一切がなかったときに、神の知恵として神がそこにおられたということを記しています。

(2) **知恵によるわざ** (27～31 節)

世界が存在する前にあった知恵が、創造の際に、どのようなわざをなされたかについて記されています。

●創造のみわざにおいて、神がその知恵を凝らして天地を造られたことを、箴言の作者はここで記しているのです。30節の「神のかたわらで、これを組み立てる者(=名匠)」が、天地宇宙を創造したということです。確かに、私たちの肉体の構造ひとつをとってみても、そこには今日の医学の最高技術を結集しても究め尽くすことのできない精巧さを持っています。天体望遠鏡で見える世界だけでなく、顕微鏡でなければ見えない世界も、実に緻密な秩序をもって組み立てられています。その神秘的な世界には神の知恵なしには存在し得ない見事なデザインが存在しています。

●アラム語訳聖書が創世記1章1節を「主は、知恵をもって天地を創造された」と訳しているのは、「初め」(「レーシート」**תְּשִׁיבָה**)ということばを、箴言8章22~31節に基づいて、「知恵」(「ホフマー」**חִכְמָה**)と理解したからだと言及されていますが、それこそがミドウラーシュの結実だと言えます。使徒パウロもこの「知恵」の実体こそイエシュア・メシアであると悟った一人なのです。

【新改訳改訂第3版】Iコリント 1章30~31節

30 しかしあなたがたは、神によってキリスト・イエスのうちにあるのです。キリストは、私たちにとって、神の知恵となり、また、義と聖めと、贖いとなりました。

31 まさしく、「誇る者は主を誇れ」と書いてあるとおりになるためです。

●私の恩師である小林和夫師は、この箇所を文法的には並列としてではなく、「キリストは神に立てられて、私たちの知恵となった。すなわち、義と聖めと贖いとなった」と読むべきであるとしています。つまりここで語られている意味は、イエシュアは創造のみならず、救いの面においても、また神の定められたご計画の実現においても、人知では到底測り知れない神の知恵をもってなされることを示しています。使徒パウロはそのことを「みこころの奥義」と表現しています。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 1章9~10節

1:9 みこころの奥義を私たちに知らせてくださいました。

それは、この方において神があらかじめお立てになったみむねによることであり、

1:10 時がついに満ちて、実現します。

いっさいのものがキリストにおいて、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。

●エペソ人への手紙の第1章(1~14節)には、「キリスト」「イエス」「御子」という表現が多用されています。それはまさにパウロにとっての「**こだわり**」です。どこを切っても同じ顔が出てくる「金太郎飴」のように、神のご計画の初めから終わりまで、どこを切ってもキリストなしには成り立たないことに霊の目が開かれたからです。使徒パウロが「創造の先在者である知恵としての御子」の存在、神のご計画における初めと終わりを導かれる「神の知恵としてのキリスト」の啓示は、おそらく知恵文学の中から導かれたものであったと推察できます。その知恵の概念は、ギリシア的・ヘレニズム的な「知恵」(「ソフィア」**σοφία**)とは全く質を異にするものです。

むすび

●創世記の冒頭の「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)は、前置詞の「ベ」(בְּ)が「レーシート」(רֵאשִׁית)についてのもので、この「レーシート」という言葉を手掛かりとして、これを「はじめに」と訳すだけでなく、先在者である「知恵」の存在、つまり、先在者としての神の知恵である御子(キリスト)によって、天と地が創造されたと解釈することができるのです。その場合、「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)の前置詞「ベ」(בְּ)は、「～によって」という手段を表わす前置詞として解釈され、神が先在者である「知恵」(神の御子)によって天と地を創造されたと解釈されます。その場合、1節は従属節ではなく、従来のように、「知恵によって、神は天と地を創造された」と独立節として解釈する必要があります。

●私は、以前、なぜ神が「父」(「アーヴ」אָב)と呼ばれるのかという問いかけから、すべての本源である神=主を象徴する「アーレフ」(א)が、「ベート」(ב)の文字を必要としている秘密を明らかにしようと思いました。つまり、見えない神である「父」が、「御子」(「ベーン」בֶּן)、あるいは「息子」(「バル」בֵּר)、あるいは「長子」(「ベホール」בְּכוֹר)と「信頼する」(「バータハ」בָּטַח)ことによって、神のご計画が実現されることをミドウラーシュしました。神と人とが永遠に住むための神の家(「ベート」בֵּית)を「建てる」(「バーナー」בָּנָה)ために、天と地を「造られた」(「バーラー」בְּרָא)御子が、天から地に「来られ」(「ボー」בּוֹא)しましたが、その際、御子は処女(「ベトラー」בְּתוּלָה)であるマリヤを通して生まれました。それは御国の福音=「良きおとずれを宣べ伝える」(「バーサル」בְּשַׂר)ためでした。もし人が御子を「尋ね求める」(「バーカシュ」בְּקִשׁ)なら、だれでも神の救いの「祝福」(「ベラーハー」בְּרַכָּה)に与ることができます。御子はアブラハム、ダビデと結んだ契約(「ベリート」בְּרִית)を成就されるばかりか、「新しい契約」によって、神と人のかかわりのみならず、罪によって呪われた地を完全に回復してくださるのです。それは御子イエシュアによって「すべてのものが一つになること」です。それは、「結婚する」(「バーアル」בָּעַל)ことの中に隠された奥義でもあるのです。ここに挙げたヘブル語の語彙の頭文字はすべて「ベート」(ב)の文字で始まっています。なぜ神が「父」と呼ばれるのか、それは「アーヴ」(אָב)という二つのヘブル文字の中に隠され秘められているのです。

●しかし今回は、そうしたアプローチではなく、「ベレーシート」ということばの中に隠されたミドウラーシュでした。それは、先在者としての「知恵」という存在によって、神が天と地を創造されたということが、「ベレーシート」ということばの中に隠されているという発見です。使徒パウロがどのようにして「万物は御子によって造られた」(コロサイ 1:16)ことを知ったのでしょうか。また、彼はどのようにして、「御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っている」(同、1:17)ことを知ったのでしょうか。それは、彼がヘブル語聖書を通してミドウラーシュした、その結果として与えられた啓示だったと言えないでしょうか。「御国の福音」を余すところなく宣べ伝えたパウロにとって、「ベレーシート」という聖書の冒頭のことばは、その一つの手がかりとなったと言えるのではないのでしょうか。